

果分涅槃を得ると云ふことにて往生即成佛の義なり。「證卷」に「因淨故果亦淨也」と云ふ、他力廻向の故に、往生するなり直ちに満果を開く、「一念須臾之間速疾超證無上正眞道」の意なり。「證卷」に幾多の文證を出す、見るべし。

已上三義の中、初二義は正定聚因分の義、第三義は果分涅槃の義なり。今は、報土の頓證を顯はす下なれば論文の速得菩提即無上涅槃の義に取るべし。

次に自然徳とは、安樂淨土の土徳と云ふこと、『大經』には「自然之所牽」と云ふ、此は願力に引かれて、往生することを云たもので、他力の強さを現はして自然と云ふ、今の自然も、願力成就の報土の土徳の強さを現はして、自然徳と云ふ、安樂淨土には、煩惱を其儘菩提にする土徳がある。此は如何なる者も抵抗の出來ぬ不思議力が、淨土には具はつて居るそと知らせたものなり。此自然徳と云ふことを心得るには、性功德の意で解すと能く分る、性は必然の義、不改の義、一切善惡の往生人を、皆自分に同化すること、百川萬流の海に入て一味なるが如し、之を安樂淨土の土徳とする。此自然徳の三字は、清淨功德に性功德を加味して作られた文字であらうとは開悟院の考案なり。

次に淤泥華止とは、『論註』下二行「淤泥華者、經言、高原陸地不生蓮華、卑濕淤泥乃生蓮華、此喻凡夫在煩惱泥中、爲菩薩開導、能生佛正覺華。」文に據る、上の一行半は、報土の證果を明す、「願土ニイタレハスミヤカニ、無上涅槃ヲ證シテソ」の意。是より下二行半は、還相廻向にして涅槃の大用を明す、「スナハチ大悲ヲオコスナリ、コレヲ廻向トナツケタリ」の意、五功德の中では、第五の蘭林遊戯地門の意を述ぶるなり。淤泥華とは、蓮華のこと、淤の字は水中泥と註して、淀、澱、通じて用ふる、泥中に咲く花にて蓮なり。

經言とは、『維摩經』佛國品の文にて、『註經』七六云「若見無爲入正位者、不能復發阿耨多羅三藐三菩提心、譬如高原陸地不生蓮華、卑濕淤泥乃生此華、乃煩惱泥中乃有衆生、起佛法耳。」文、『大寶積經』百二十たにも類文あり、此は、孤調解脫に陥れる二乗を彈斥する文なり、惡人は成佛すとも二乗は成佛せずと彈訶して、二乗の小志を轉じて、大乘に向はしむる文なり。今は、夫を轉用して、還相廻向の爲に、生死煩惱の中に交りて泥中の衆生を教化し、惑染の泥中より清淨信心の華を開かしむるに喩顯した

るなり。

此文は、淨土の菩薩の四種功德の隨一たる、不動遍至の徳の利益を明す文にして、八地已上の大菩薩が本處を動ぜずして、遍く十方世界に至りて供佛度生し、所化の衆生の心田に信心の華を開かしむることにて、「遊煩惱林現神通入生死菌示應化」者の化益の意なり。正覺華とは、上の眷屬功德の正覺華に比するに、名同體別なり、上は、淨土の正覺華にして、正覺即華なり。今は、正覺を得る因華にして、他力信心を指す、信心を因として佛果の正覺を得る故なり。

因に菩薩四種功德を辯ぜば、

第一は不動遍至の徳、又は不動應化徳とも云ふ、淨土の菩薩が本處を動ぜずして、十方世界に現身して、供佛度生する徳なり、之は動靜不二、止觀相順の相を現はしたるものにて、寂而照の徳の示現なり、

二に、一念遍至の徳、又は一時遍至徳とも云ふ、應化身を十方に現はして、萬機普益を爲す相を云ふ、一念は早きを云ひ、一時は多所同時を云ふ、速疾に多方多界に佛事を

なすを云ふ。

三に、無餘供讚の徳、又は一切讚歎徳とも云ふ、此は淨土の菩薩が公平の心持で、淨穢の土に出現して供佛應化するを云ふ。

四に、遍示三寶の徳、又は持嚴三寶徳とも云ふ、此は三寶なき無佛の世界に入て、佛法を興し、三寶を興隆し、莊嚴するを云ふ。

已上四徳の中、第一は總にして、他の三は別なり、第一の本處を動ぜずして、應化する相を示すが、後の三徳なり。還相廻向とは、淨土の菩薩の四種功德のとなり、念佛行者が淨土に往生すれば、直ちに横超即證して、大般涅槃を悟る、證悟の上より、從果向因して、八地已上の菩薩として、本處を動ぜず、一身無量身を現して、佛事を爲すが還相廻向にして、之が證大涅槃の大用である、故に我祖は「證卷」還相廻向の下に、菩薩四種功德の文を全引し給ふ。

次に「斯示如來本弘誓不思議力」の二句は、上の往還二種の作用は、全く願力廻向なりと結ぶ文なれば、本弘誓とは十八、十一、二十二の三本誓と見るを至當とする、『論註』

卷末には三願的證して、衆生往生の因果悉く願力廻向の義を成じ、其願力の強さを顯はすに「劣夫乗空」の喩を擧て、全無力者の飛行自在なるは、實に他力不思議の力なりと結論してある。

今、其文意に依て、因の五念門は第十八の願力廻向、果の前四功德は第十一の願力廻向、第五の功德は二十二の願力廻向、即ち三本誓願力の廻向に依て、煩惱具足の凡夫に二利圓滿の妙果を得せしむるものなりと總結するが、最後の「入出二門名他力」の一句なり。

此「入出二門名他力」の結論は、一偈の宗要なるのみならず、實に『論註』上下二卷の結論なり、卷末の三願的證に依て、『淨土論』が他力の法門を開顯し、凡夫救済の道を開きたる聖典となるのである。若し、鸞師の『論註』が無かつたら、『淨土論』は丈夫志幹の菩薩が同類の居士に、大菩薩行を授ける難行往生の聖典となつたことであらう。然るに、鸞師は天親所共の衆生を『觀經』下凡の惡人と定め、信佛因縁他力救済の道を開かれたればこそ、惡人往生の道が出現したのである。末代の衆生に他力往生の道を開き、凡愚

易往の要津を示したるは、實に玄簡居士の大功と云はねばならぬ、故に、我祖は、曇鸞を讀じて「天親菩薩ノミコトヲモ、鸞師トキノヘタマハスハ、他力廣大威徳ノ、心行イカテカサトラマシ」と鑽仰せられた。

第二章 兼明相承章

第一項 道 綽 讚

一 聖 淨 二 門

道綽禪師 玄忠寺

道綽和尚解釋曰、	大集經言我末法
起行修道一切衆	未有二人獲得者
在此起心立行者	則此聖道名自力
當今末法是五濁	唯有淨土可通入

上來、天親曇鸞二師を讀じて、二門他力の旨を讚歎し畢りたれば、之にて一部の正宗

は終れり、此より以下、道綽善導の二章は、曰は、流通分、若くは餘波と見るべきものである。二門他力の旨を、綽導二師も相承け、相繼ぎて、流傳されたと知らせるのが、以下二章の所明なり、依て、『大意』には兼舉相承助成前義と分科し、立名してある。問云、相承を明すと云は、七祖を出すべし、何故に、四祖のみを擧げて、三祖を略するや。

答云、有人二門偈十需答を作りて此義を問ひ、二頌を作る。

復惟四祖盡レ 師承絶レ本朝 兩祖有何咎 受レ此擯棄レ杖
 若言限漢土レ 妙雲亦空消 應知廢レ此佛 玄簡正失レ録

七祖の安心一致の邊は問ふ迄も無き所、されど出沒は時處に依る、今は、他力廻向の義を顯はすを主として、綽導二師の其義を繼紹せしことを頌するのみ、然し、安心一致の上は、他の三祖を捨てたるにあらず、龍樹は曇鸞に、横川吉水は終南光明に、合攝せしめしのみ、高祖の聖典を見るに、必しも七祖を並列せず、『略本』『愚禿鈔』を見よ、『三經文類』を檢せよ、必しも七祖釋を列ねざるなり。次に、一章の大科を掲げて、大要を

知り易からしむ。



道綽禪師は末法の出世にて、佛滅後一千五百十一年即ち末法に入て十一年目に誕生せられた。即ち、陳の天嘉三年なり。三時の數へ方には諸説不同なれども、綽師は正五像

千説(『摩訶摩耶經』の説)を採用せらる(『安樂集』下₄₆)

此一段の文の據は、『安樂集』上₃₇聖淨二門決判の文、并に₃₇より₃₇へかけて雁門の『論註』を引用して、自力他力を判ずる文なり。

『大集經』の文は、現流の經に此文なしとて、日遠の『無得道論』より攻撃の鋒を向けるところであるが、此は取意の文にて、此通の文は經文にはない。『安樂集』上₃₇に、五箇の五百年を明せり。即ち、第一の五百年が智慧堅固、第二の五百年が禪定堅固、第三の五百年は多聞堅固、又は持戒堅固、第四の五百年は造寺堅固、第五の五百年が鬪諍堅固にて、白法隱滯の時なり。已上五箇の五百年の中、前三は戒定慧の三學が具足してある故に佛道修行するものあれども、第四の五百年になると塔像を起立する位の事福で、佛法の氣分を見せて居る程度に過ぎず眞正の修行者は一人もない、乃て「未有一人得者」と云つたもの。(正像末の三時を教行證の三法と對配して、興廢を明す説は『義林章』六本₃三寶義林に出て居るが、没後に出來た書物で西河の所覽に非ざれば引例す可らず)。「起行修道」とは、道は因道にて、菩提心を起して六度萬行を修すること。

在此の此は、娑婆世界を指す、「起心立行」は發心修行にて、大願を發して萬行を勤むること。此の起心立行の文の次に、『安樂集』では「願生淨土此是自力」の八字あり、之では、此土入聖にあらずして他土得證である。

起心立行	世々勤修	願生淨土	難行自力	得通遊 ₂ 四天
偏乘佛願	臨終迎接	往生淨土	易行他力	從 ₂ 王乘 ₂ 虛空

右の様では、聖淨二門が混亂する、我祖は、今文及「化卷」に此土入聖が聖道自力、他土得證を淨土他力と決判してある。

今、此『樂集』の文は如何に取扱ふべきやと云ふに、有説では、願生淨土の四字は錯簡なれば、他力の下に移すべしと云ふ。『流情記』では、起心立行の文は、正しく聖道難行の自力を示し、願生淨土の下は、兼て要門横出の機を擧ぐると云ふ。海東師の『大意』は、此中、願生淨土と言ふと雖、聖道自力の修行に就て願生するのなれば、矢張り聖道門である云ふて、『集』上₃₇鈍根の新發意の菩薩が發心しても、此世は障多く、又善知識に乏しき故に、發心が満足せぬ、仍て淨土へ轉生して、諸佛に親近して修行成就すると云

ふ『大論』の説を引ききて、此は聖道門の變態であると説いて居る。夫は兎もあれ、『集』の上の話、今、此處へ引用された祖師の思召は、此土入聖得果を聖道門とする意である。夫故に、願生淨土の四字が除きてある。されば、茲では「化卷」と同意に見ねばならぬ。因に聖道淨土の名目を解せば、聖道を大聖(佛果)に至る道と見れば、聖の字佛のことになる。聖者の修する道と解せば、聖の字三乗の賢聖のことになる。次に、淨土も穢土に對する語とすれば、所期の土となる、聖道に對する語とすれば、所宗の名となる。

「當今末法是五濁唯有淨土可通入」の二句は、淨土他力の一門は、三時に亘りて、常に通用門が開かれてあるとの意である。有説に、此文迄を『大集經』の文と解したのを見たが、夫は誤である。『大集經』の取意の文は、「未有一人獲得者」まで、終りてある。乃て御眞本たる大味本の末の字の左に、未と讀切りてある。次の「在此起心」の文は、『樂集』上三計の文にて『大集經』ではない、まして「唯有淨土一門」の文は、經文ではないこと勿論である。

されば、西河は何に據てケ様に述べられたかといへば、『集』の上を見るに、『大經』が引てある。第十八願と下々品の文とを合糅して引用し、三學無分の末法の相を事實に現

はしたが下々品の機相なりと見込、此の末世の惡機を救濟する教法は十聲稱佛の妙教に限る、火車來現の惡機が十念々佛にて往生するは、第十八願の乃至十念の誓約によると見て、十八願を引證せり、之に依て、西河の意は『大經』に據つて『月藏經』を見られたものと思はる、『大經』の序分には、如來出世の本懷を説きて、先づ初に、光闡道教と諸教を開演し、最後に眞實之利の大益を與ふるが、如來出世の本意なりと宣言せり、光闡道教とは一代教なり、此は『大經』の序分なり、眞實之利とは、能詮に就かば『大經』なり、所詮に約せば、無上大利の名號なり。光闡道教は隨他の方便なるが故に、之を流通に徴するに、當來之世經道滅盡して蔭を止めず、眞實之利の名號法は、隨自の眞實なるが故に、特留此經止住百歲して、永く群生を利潤す、末法に至りては、行證するもの未有一人の故に、經道滅盡す、末世の惡人を救ふものは、彌陀の本願なるが故に、特留此經止住百歲すと、如是く『大經』を以て『月藏經』を批判し、二門の興廢を明かにするが西河の發揮なりと伺ふ所である。上の如く、『大經』と『月藏經』とを併せ見ることは、全く祖師の指南による、『化卷』『六要』九辯已下に、『月藏』の五箇の五百年説を引き、次に正五像千末萬

を擧げて、特留此經の文を引き、如來の哀愍を現はし、之を結ぶに「未有一人得者」と「淨土通入」の文を引けり、祖意の所在知るべし。

次に聖道難證に就き、『安樂集』に二由を擧る。

一に、「去大聖遙遠故」とは時に約す、五濁増盛の末世には、自力の修行は成就し難き故なり。

二に、「理深解微故」とは機に約す、所證の理は甚深にして、而も能證の智解は甚だ微弱なる故に、短綆を以て深井に臨むが如く、一滴水をも得難きなり。

次に淨土通入に就き、『和語燈』一冊に廣通遠通の二義出る、廣通は機に約す、廣く十方衆生を攝め、遠通は時に約す、遠く末世の群萌に潤ふ、可知。凡そ、聖道淨土の名は廢立の意を暗含す、聖道に對すれば凡道あり、淨土に對すれば穢土あるべし、龍樹の難易、雁門の自他力を確定せん爲に、二門の判を立てられたるものにて、其意捨聖歸淨に外ならず、聖道門は本聖兼凡の教、淨土門は本凡兼聖の教たるを知らしめ、難行自力の聖道門を開きて、易行他力の淨土門に來れと云ふが二門判の主旨なり。

雜	行	自	力	聖人所修道	穢土成佛	聖道門
易	行	他	力	凡夫所修道	淨土得證	淨土門

二機教相應

今時起惡造衆罪	恒常如暴風駛雨
本弘誓願令稱名	是爲穢濁惡衆生
是以諸佛勸淨土	

(本據) 初一行と後の一行は、『樂集』上三行「若論起惡造罪何異暴風駛雨」是以諸佛大慈勸歸淨土の文に據る。中間の本弘誓の一行は、次上の「大經云若有衆生縱令一生造惡臨命終時十念相續稱我名字若不生者不取正覺」の句意に依る。

五行の中、初二句は末世の機相を明す、之を縮むれば第四句の穢濁惡衆生の五字に収まる。

「起惡造罪」とは、惑と業となり、起惡は煩惱にして、意業に屬し、造罪は、惡業にして、身口の發動に約す。之を前の聖道の修行で云へば、起心立行に當る、自力の行者の發大心の代りに、末世の下機は煩惱を起す。又、自力の行者の修大行の代りに、末世の衆生は惡業を作るなり。煩惱は心中に在て惡念百出すとも、不可見なること暴風の如く、惡業は身口に現はれて、可見有對なること駛雨の如し。

「本弘誓願」とは、第十八願なり。

「令稱名」とは、乃至十念の稱名を、『觀經』の下々品の機に與へて、善知識が枕頭に立て、稱名せしむるを云ふ、下々品の上では、善知識の令稱なれども、他力の稱名なれば、本願力より令稱せらるゝなり。仍て、末に約すれば、知識の令稱、本に約すれば、本願力よりの令稱なり。茲は、第十八願を『觀經』下々品より眺めて、稱我名號の本願として取扱ひしものなり、善導の『禮讚』加減の文は、之を相承したるものなり。元祖の念佛往生の願との給ふは、此筋なり。

此外、唯三心を以て取扱ふ義門あり、我祖の常教たる至心信樂之願、本願三心之願と眺める筋にて、西河では『安樂集』上卷「具此三心若不生者無有此處」文、又善導では『散善義』三「三心既具無行不成願行既成若不生者無有此處」文の文は、唯信心の扱なり。此は願成就より本願を眺めたるものにて、稱名は乃至の二字の中に隠されてある。

之に就き、『六要』七辯に問答あり、行信不離なれば、行を擧ぐれば信は自ら具はる、信を擧ぐるも亦然り、如實の稱名には必ず信心が具はる、故に元祖は『和燈錄』五辯に有人が三心を略する由を問へるに答へて、衆生稱念必得往生と知りぬれば、自然に三心を具足する故に、此理を顯さんが爲に略し給へるなりとのたまふ。

又、一眞實信心必具名號なれば、信には行は離れざるなり。仍て、六要主は「稱名信心更不相離」影略互顯示「此義也」と云へり、『六要』三辯參照すべし、此處は大切な處で、古來、第十八願の三信十念は玉鏡の表裏、圓珠の背面で、一方を擧ぐれば一方が收まると申し傳ふる所なり。

(文解) 初二句は、本願所被の機相を顯はす、本弘誓願等の二句は、能被の法が機に應ずることを明す、最後の一句は機教相應の要法なるが故に、諸佛が同勸同證して、往生

を勧むることを明す。

之を三經に對するに、初二句は『觀經』の機の眞實を明し、中一行は『大經』の法の眞實を明し、上の機法兩實を「是以」と受けて、『小經』に諸佛が勸勵することを明す。

之を上二の二門の興廢に望むるに、聖道教の滅盡するは何故か、云く自力難行なるが故なり、淨土教の特留するは何故か、云く他力易行なるが故なり、其他力易行の相を三經に依て説示し、末法五濁の衆生を救濟するは、選擇本願の念佛にあることを宣説し、眞實之利とは選擇本願の念佛にして、頓て是れ三經の眞實なることを教へられたるものなり、依て、宗祖は「化卷」『六要』九に「三經眞實選擇本願爲宗也」との給ふ。

(三) 三信相應

從令一生造惡者	三信相應是一心
一心淳心名如實	若不生者無是處
必得往生安樂國	生死即是大涅槃
則易行道名他力	

(本據) 『安樂集』上三「若有衆生縱令一生造惡」文「同」上三「若能相續則是一心、但能

一心即是淳心、具此三心若不生者無有是處」。「同」下三「遊則入八正之路、至則到

大涅槃、一切衆生但至彼國者皆證此益」。「大經」云「必得超絕去往生安養國」文。「論

註」下三「無碍者謂知生死即是涅槃」文。「集」上三「此畢竟常樂、依何而得、要依大義門、

大義門者、謂彼安樂佛國是也、故令一心專至願生彼國、欲使早會無上菩提也」文。

(義解) 上の「本弘誓願令稱名」は、念佛往生の願として稱名行の勧め、今、此一段は念

佛往生を信ずる信心爲本の勧めなり。上は所信の行、今は能信の信なり、上は「衆生稱

念必得往生」の處、今は「と知りぬれば三心は自ら具足する」と示す所なり。

縱令とは、五乘齊入を顯はす、『選擇注解鈔』一七云く、「縱令云言惡人限サル事、

示也」と。

三信相應是一心とは、三信とは淳一相續の三信なり、淳心とは、淳は淳朴の義で、手厚く粧ろいのなき心にて、信ずる心一筋にして、若存若亡の心なきを云ふ。一心とは無二の義で、心の掛け所の一なるを一心と云ふ、或は地藏、或は弘法と、心のかけ所の定

らぬは、信心不一なり。今は夫と違ふて、唯頼むべきは彌陀如來と心が一所に決定したのが一心である。相續心とは、憶念心が後々迄相續して餘念の間らざるを云ふ。

本、此三信は論主の一心を開いて見せたもので、論主の一心に專一と無二の二義がある。其無二の義を一心と名け、專一の方を相續心と名けたもので、此二義を統攝して、「無疑無慮乘彼願力」て往生一定と思ひ定めた處を淳心と云ふ。されば、淳心は總にして、一と相續との二心は別である。淳心の様を知らせたが一心相續心である。然らば、淳心は疑蓋無雜の純心にして、三信即一の信樂、即ち成就の文の信心である。

三信相應とは、淳一相續の三信は仲善く相成し、相應して、仲違ひせぬのが論主の一心である。即ち成就の信心である、ソコデ「論註」に「與此相違、名如實修行相應、是故論主建言我一心」と云つて、三不と相違して、相成し、相應するが如實修行相應である。名義相應である、他力の信心である、之が論主の一心であると雁門は定められた。されば、上句の一心は論主の一心である。

次に、其論主の一心の様を知らせる爲に、三信相應の様子を示すが一心淳心等の一句なり。此一句、語は短かいけれども、『集』上_三の迭相收攝の意を述べさせられたもので、具さに云へば、「(相續心)一心(一心)淳心_{ナレハ}名如實」とあるべき筈なり。偈頌の故に、文字を節約してあると心得べし。上に相應と云ふ故に、今、此に如實と云ふ、如實修行相應の略と見よ。

問云、唯信ずる計りて未だ稱へざるに、如實修行と名くるは何故ぞや。

答云、『散善義』云「三心既具無行不成」文。三心具足の行者は必ず行を具する、故に經文に「具三心者必生彼國」と云ふ、我祖は之を承けて、「眞實信心必具名號」との給ふ。

若_〇不_〇生_〇者_〇無_〇是_〇處_〇とは、淳一相續の三信を因願の三信と會合して、第十八願中に攝める文なり。

若_〇不_〇生_〇者_〇とは、第十八願の目印なり、玄忠は信心不淳と説きて、論主の一心を願成就の信心に會合せしが、西河は、更に溯りて、因願の三心が玄忠の三信にして、又論主の一心なることを決定せしなり。是に於て、淳一相續の三信と因願の三心とは、全く同一なりや、否やの論起る。或云、淳一相續の三信は、序の如く、本願の三心に配當すべし

と、或云、淳一相續は一心の義相にして、合三爲一の信樂を開きしものなれば、一一に信心の字を附してある。願成就の信心歡喜の信心なれば、三心に配當すべきものにあらず、『略本』の一心の轉釋でも、又『廣本』の「信卷」末初（『六要』五三）の一念の轉釋でも、一心に就きて釋してある。されば、各別に配當せざるを佳とす。

「是處」の「處」は、『法華玄讚』二_三「處謂道理」とある。處の字を理とよむことは、經文所々に出づることなり。

「必得往生安樂國」の二句は、往生即成佛の證果を明せるものにて、『大經』の「必得超絕去往生安養國」の語勢を學びて、大涅槃の證悟を示す、『集』上_五の大義門たる、安樂淨土に往生して、畢竟常樂を得ると説く文の意を述ぶる。畢竟常樂とは、究竟の四徳波羅密にして、無上菩提なり。故に、次の文に「早會無上菩提」と説きて、『論』論註の速得菩提往生即成佛の義を踏襲することを示せり。一生造惡の凡夫、云何にして早く菩提に會するや。答云、本願他力に依るが故に、『集』上_三云「既有他力可乘、不得自局已分、徒在火宅也」文。

已上、西河の一章を通觀するに、他力廻向の教行信證を明せるを見る、最初の四行に聖道淨土の二門を明し、聖道の難證を捨て、淨土門に通入すべきことを教ふるは、眞實教なり。次に「今時起惡」等の二行半に、五獨惡時の衆生を助くる法は、選擇易行の稱名の一行にあることを示すは眞實行なり。次に「縱令一生」等の二行に、如實修行相應の信心を明し、淳一相續相成相順の三信を示すは、眞實信なり。次に「必得往生」の一行は、生後の得益にして、往生即成佛の大果を感ずとは眞實證なり。

如是く、眞實の四法は衆生往生の因果、全く他力に頼ることを顯はすものにして、是れ頓て『安樂集』一部の旨歸を示すものなり、『樂集』一部十二大門を開くと雖も、要を撮れば、第三大門の一門に歸する、此中、難易二道の判、自力他力の別を明し、之を統ぶるに、聖淨二門の判釋を以てし、難行聖道の自力を捨て、易行淨土の他力に歸せよ、と、勸信求往するが『樂集』一部の旨歸にして、西河の本志實に此に在り、故に、吾祖は「本師道綽禪師ハ、聖道萬行サシオキテ、唯有淨土一門ヲ、通入スヘキミチトク」と讚じて、二門の興廢を示し、正像末の三時に互りて、彌榮なる淨土門に入る本意は、本願

他力を頼みて自行化他し、往生の大益を獲得するに在りとして、「本願他力ヲタノミツ、五濁ノ群生ス、メシム」と歎じ給ふ。如是く他力に頼て、轉迷開悟せよと勸信求往する所、全く北天雁門と轍を同ふすることを顯はして、最後に「則易行道名他力」と結び止め給へるなり。此最後の結文、前の「此聖道名自力」の文に對檢するに、易行道の下に淨土の二字を加へて見れば、能く義が通暢する。隨て、上の聖道の上に、難行道の三字を加へて見るべし。

第二項 善 導 讚

一 眞 實 行

善導禪師 光明寺

善導和尚義解曰 念佛成佛是眞宗

善導和尚の傳は、『漢燈』九十五已下六傳を出す、尋て見るべし。善導は熱心なる願生行者にして、一心念佛して、寒中尙汗を流すと傳ふ、行路人と共にせず、俗事を談じて念佛を妨げらるゝを恐れてなりとは、誠の念佛好なりしを知るに足る。禪師は『觀經』に就

いて『四帖疏』を著し、古今を楷定して凡入報土の大道を闡き、佛の正意を明かにせし人師なり、『四帖疏』は教義に關する根本を開説せし疏なれば、本疏と稱す。之に對して、修行に屬する書四部あり、之を具疏と云ふ、其中、『往生禮讚』は尋常勤行の作法、即ち六時禮讚を勤修する事相を明す。次に『般舟讚』は、『禮讚』の長時に對して此は別時、即ち七日若くは九十日と云ふ一定の期日を以て、常行三昧即念佛三昧を修することを明す。

『法事讚』は、此も別時なれども、臨時法要て一日一夜讀經念佛の法事である。次に『觀念法門』は、佛前勤修の行法にあらず、觀佛念佛兩三昧の修行の方法を教ふるもので、此は唯其形式を發表したのみで、直ちに實行に移すべきものでない。

(解釋) 「念佛成佛是眞宗」とは、語は法照禪師の『五會法事讚』上三に出づる、『六要』二六引用せり。法照禪師は、後善導と傳へ來る人師(『樂邦文類』三六『漢語燈』九三)にして、我祖は善導と同格に取扱ひ給ふ。(『唯信文意』五『御自釋』七)。此語は、法照の上では、禪律も念佛も、共に正法にして眞宗なれども、我祖は善導の廢立意より、此文を讀み直して、念佛獨り眞宗にして、禪律等は不眞宗と定め給ふ。持律坐禪は結構な法には相違なきも、

末法の時機に相應せざれば、永不成佛の法にして方便假門なり、假令、一旦の榮を現はすことあるも、永續性に乏し（頃日、或る禪寺の大徳急に遁身して行方不明、其原因も探ぐれば投機失脚に據ると、澆李なる哉）そこで「行卷」では、「禪律如何、是正法ナリ」と讀みて、「萬行諸善是假門」の中へ葬り去りたまへり。

念佛成佛とは、萬行不成佛に對す。眞宗とは、假宗に對す、已上は聖淨相對の義。更に要弘相對の義あり、『末燈鈔』^四云「淨土宗ノナカニ眞アリ假アリ、眞トイフハ選擇本願ナリ、假トイフハ定散二善ナリ、選擇本願ハ淨土眞宗ナリ、定散二善ハ方便假門ナリ」文。定散二善の假宗に對して、選擇本願の念佛を弘通するを眞宗と云ふ。『散善義』終りに、「眞宗匠遇淨土之要難逢」とは要弘相對に約す、聖道一代の法を淨土の要門中に攝し、弘願念佛に對して廢立を談ずるが善導の高判なり。今、善導の弘むる念佛は、五乘齊入の念佛にして、大小の聖人も重輕の惡人も、齊しく洩らさず成佛せしむる妙法、之が玄忠所弘の同一念佛無別道故の教を相承するものと、見込給ふが我祖「行卷」（『六要』^{三六七}）の御指南なり。

此念佛は、無上菩提の正因として、速滿寶海の大益あらしむるは何故ぞや。云く、本願一乗の法なるが故なり、一佛乗の一因に依て、無上菩提の一果を得る、一佛乗の因とは「一切善惡凡夫人莫不皆乘」の強緣なり、一佛乗の果とは、「即證法性之常樂」の妙果なり。如是く、一切の衆生をして、大願業力に依て、轉迷開悟せしむるを眞宗とする。依て、「教卷」の劈頭に「謹案淨土眞宗有二種廻向一者往相二者還相就往相廻向有眞實教行信證」文。往還二種の功德利益を一名號に攝歸して、南無阿彌陀佛より廻向するが眞宗なり。是故に、行者は聞名の一念に、往還二種の大益を得る、之を念佛成佛是眞宗と云ふ、如此く見來る時は、善導の弘化は、全く『論』論註の精粹たる、二門他力の妙義を弘通するものなり、故に、先づ冒頭に善導弘化の心髓を標舉して、「念佛成佛是眞宗」と掲げたるなり。

二 眞 實 教

即是名爲一乘海

即是亦名菩提藏

即是圓教中圓教

即是頓教中頓教

(本據) 『玄義分』歸三寶偈に「頓教一乘海」文。『般舟讚』に「觀經彌陀經等說即是頓教菩提藏」文。『行卷』所引の遵式は、「了義中了義、圓頓中圓頓」と云ひ、元照は「圓頓一乘純一無雜」(『六要』三社)と云へり。此等の意味を胸に攝めて、善導の疏意を付度して、次の一行を讚歎し給ふなるべし。

(義解) 一乘海とは、眞宗念佛の徳相を示す語にして、乘は運載の義なれば、行者を乗せて從因至果せしむるを云ふ。

一は純一無二にして、唯一の乗物に乗託して、彼岸に度るを云ふ。序題門に「一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲増上緣也」(『玄義』三)と云ひ、二乘門に「正由託佛願以作強緣致使五乘齊入」(『玄義』六)と説くが如きは因の一乘にして、五乘の機、齊しく佛願に乗託して彼岸に到る、此外に、生死を離るべき道、二もなく、亦三もなし、唯一念佛の一法に由る故に一乘と云ふ。此は因の一乘なり。依て、「行卷」(『自釋』三)に「大乘無有二乘三乘、二乘三乘者入於一乘、一乘者即第一義乘、唯是誓願一佛乘也」と云へり。果の一乘とは、一切人皆悉く、究竟一乘の彼岸に達する故に、一乘と云ふ、故に、

「行卷」に果の一乘を釋して「得一乘者得阿耨多羅三藐三菩提」と云へり。若し、『論註』で取れば、「同一念佛無別道故」の一因に依て、大乘善根界の平等一味の證果を得る所に當る。元來、一乘海の釋は『勝鬘經』の説を轉用し給ひしものにて、『勝鬘經』は三乘建の法相なるを、我祖は四車家建に轉換して用ひ給ふ。其意、花天密禪の一乘を門内の大乘に攝入して、誓願一佛乘を大白牛の眞實乘となすに在り。三車、四車の義は『法華』の譬喩品より起りて、方便の三車を設けて諸子を誘引し、遂に眞實の大白牛車に皆乗せしむる如く、三乘の方便教を以て諸機を調熟し、最後に一切皆成の妙法に均證せしむるを云へるものにて、眞實成佛の道は唯有一乘法にして、無二亦無三なり、今之を應用して、「十方佛土中唯有往生法無二亦無三除佛方便說」で、唯々誓願一佛乘に由て五乘齊しく得脱する義を示すを一乘海と云ふなり。

海とは、同一鹹味を喩顯したるものにて、此海の字、善導では『禮讚』に「彌陀智願海深廣無涯底」と云ふて、本願一乘の救濟力の無涯を示す語とする。吾祖は『行卷』に海を釋して、「言海者、從久遠已來、轉凡聖所修雜修雜善川水、轉謗法闡提恒沙無明海水、

成_二本願大悲智慧眞實、恒沙萬德大寶海水、喻之如_レ海也_一文と云ふ、此轉の字に、轉變と轉滅の二義ありて、自力雜善の川水(少量)も謗法闍提の海水(大量)も、本願の大海に流注すれば、衆水の海に入て一味なるが如く、煩惱の當體を其儘菩提の水となる、『唯信文意』^五「轉ストイフハツミヲケシウシナハスシテ善ニナスナリ、ヨロツノミツ大海ニイリヌレハスナハチウシホトナルカコトシ。」此は佛力他力に由て、轉惡成善の益を得る約體轉變の義なり。加之、自力雜善を捨て、他力に歸し、逆謗の惡心を轉じて、本願を信ずる故に、約相轉滅の義も具はる。されば、此轉の字には、轉變・轉滅・體と相との二義を具すと心得べし。兎もあれ、一乘海とは、一切善惡の凡夫を拯濟する誓願一佛乘教と見れば、頓教一乘海の眞實教となるなり。因に、『十地經』の海の十徳を列ねて、檢索に便にす。(一)漸次深。(二)不受死屍。(三)餘水失本名。(四)同一味。(五)無量寶聚。(六)甚深難度。(七)廣大無量。(八)多有大身衆生。(九)潮不過限。(十)受大雨無厭已上。

次に菩提藏とは、『六要』三_三群に四乘の意に依て、佛乘を指すと云ふ、然らば、三車の外の大白牛車にて、大乘中の實教なるを顯はす語なり。菩提とは、佛果の名にして眞實の教と云ふ。

今之を轉用して、本願圓頓一乘教を菩提藏と名づけたるなり。『禿鈔』の教判て云は、横超なり、横超とは、選擇本願を因として、眞實報土に至るの法、即ち、眞實成佛の法なるを顯はして、菩提藏と名く、此菩提の果名より、前の一乗を見れば、五乘齊入する本願一乘海は、因の一乗にして、眞實に成佛する菩提藏は、果の一乗に當る。

次に「圓中圓頓中頓」とは、上の本願一乘の歎徳にして、彌陀念佛が五乘を齊しく救濟するは、名號法の中に萬徳を圓備するに因る、『禿鈔』上_七「玄義分」の「頓教一乘海」と『般舟讚』の「頓教菩提藏」の文を引きて、「本願一乘海頓極頓速圓融圓滿之教」と云へり。之に依れば、頓教とは頓極頓速の教にして、速疾成佛の法、一乘海は圓融圓滿の教にして、證大涅槃の法と云ふ意なり。

圓頓とは、天台家常用の文字にして、圓教の教理を詮はす語なり。十果の諸法が互融互具して、隔てなく舉一全收する所を圓融圓滿と云ふ。圓融とは、凡情の隔歴の執を離れて有の儘に存在する融妙の諸法を云ふ。圓滿とは、十界互具の故に、一一が満ちて缺けざるの謂なり。台家は色香中道の家なれば、彼々の諸法、隨て一法を擧るに、三千圓具して、融攝無碍にして、圓滿圓融なり。

此台家所談の圓理を我祖は念佛の内にに入れて、御覽なさるゝ。『一多證文』行「一乗トマウスハ本願ナリ、圓融トマウスハ、ヨロツノ功德善根ミチノテカクルコトナシ、自在ナルコ、ロナリ。無碍トマウスハ煩惱惡業ニサヘラレス、ヤフラレヌヲイフナリ」。彌陀の名號の中に、萬の功德善根が一として缺くることのないのが圓滿の相にして、其名號の功德が、信ずる行者の方へ無碍自在にとろけあふが圓融の義なり。此は、聞信の一念に名號の功德が行者の方へとろけあうて、轉惡成善の益を得る、不可説の功德を我身に受得して、六趣四生の因亡じ、果滅するを圓融と云ふ、即ち、法徳として、煩惱と菩提と、一味になし給ふを圓融と云ふなり。

頓中頓とは、台家では頓足と書く、一念の心に、三千を具足するを顯はす語とする、我祖は、願力に依る頓速成佛を顯はす爲に、速の字に改め給ふ。天台でも、頓極の成佛を談ずるけれども、夫は宿植善根の大人に局る特例にして、眞の成佛は仲々出来ぬ。智慧第一の舍利弗が、譬喩品の始て授記作佛を得たけれども、速疾の成佛に非ずして、無量無邊不可思議劫の後なり、而も當成の佛位は、初住の外用たる八相作佛なり。無上菩提を去ること實に四十一段なり。

然るに、本願一乗海は他力に依るが故に、頓速に成佛する法なれば、頓中頓と云ふ、此頓速の速の字、『淨土論』の速滿寶海の速、又『論』終の速得菩提の速なり、何故に、速かに往生するや、云く、横截五惡趣の故なり、往生すれば、何故に直ちに成佛するや、云く、昇道無窮極の故なり、如是く横超の利益を得て、速疾に無上正眞道を超證するは、本願一乗の頓教に局る、天台・眞言の即身成佛、語は太だ美なりと雖も、其實質を極る時は其位低し、大悟を標榜して、衆愚を魅了する禪徒の中、眞に佛の生贍を把握する師家幾人かある。元祖云「天台眞言皆名頓教、然彼斷惑證理故、猶是漸教也、唯未斷惑凡

夫直出過三界長夜者偏是此教故以此教爲頓中之頓也(『大經釋』三)。

問云、頓中頓とは、聖淨二門各頓教ある中に、聖道の頓教は自力なるが故に、名は頓なれども、頓の實なし、之に對して、弘願一乘は名實共に頓なるが故に、頓中頓と云ふ、實に所言の如し。然るに、圓中圓は教理に約す、一多相即し、鎔融無碍なることは、二門異なることなし、何ぞ、誓願一乘を圓中圓と云ふや。

答云、實に所難の如し、然るに、聖道の圓は圓融無碍を談すと雖も、之を證知する人無ければ、有教無人にして、死圓教なり。されば、有情利益の力用なければ、佛教としては存在價值なし、有れども無き分なり。弘願一乘の圓は、萬徳を佛邊に成就して、信ずる行者に之を回施して、眞實之利を得せしむ、行者之を得て、轉惡成善の益に預かる、萬徳圓滿の大法を廻向して、無碍圓融の法益に潤はしむるは、豈圓教中の圓教に非ずや。

凡、一乘家所談の事々無碍互具互融依正不二主伴具足の如き法門は、皆極樂界の事實を、此界の事象に當筭めて談ずるものにて、深く其根本を探る時は、遂に淨土中の妙事に歸するを見る、水鳥樹林の說法、豈依正不二に非ずや、不動應化、一時遍至、豈一多

無碍に非ずや、聖道門を捨て、淨土門に入り、安養の淨利に投足すれば、一念三千も法界觀も六相圓融も、立所に成就し得べし。是こそ眞の畢竟安樂大清淨處である。之を要するに、念佛成佛の法は、萬人を乗せて渡す船(一乘海)にして、之に依て、諸人が無上菩提の證(菩提藏)を開く、是こそ眞の完全なる教(圓中圓)にして、亦速疾に成佛得度すべき教(頓中頓)である。

三 眞 實 信

眞宗 叵 _レ 過 _レ 難 _レ 得 _レ 信	難 _レ 中 _レ 之 _レ 難 _レ 無 _レ 過 _レ 斯
釋迦諸佛是眞實	慈悲父母以 _レ 種々
善巧方便令 _レ 發 _レ 起	我等無上眞實信
具足煩惱凡夫人	由 _レ 佛願力獲 _レ 攝取
斯人即非凡數攝	是人中芬陀利華
斯信最勝希有人	斯信妙好上上人

此下文長ければ分科すべし。

示極難信……………	眞宗
眞實信	釋迦
獲信ノ因縁	釋迦
依願力明獲信……………	具足
諸佛稱讚益……………	斯人

(本據) 初四字は『散善義』終の文。次の十字は『禮讚』^{十五}に出る「佛世甚難値、人有信惠難、遇聞希有法、此復最爲難。」の文にて、『大經』流通分の語意による。

次の「釋迦」等の二行は『般舟讚』^初「釋迦如來實是慈悲父母、種々方便發起我等無上信心」文。

此に諸佛を加へ給ふは、『彌陀經』の意による、諸佛の證誠は、極難信の法なるが爲なり、『和讚』に云く「眞實信心ウルコトハ、末法濁世ニマレナリト、恒沙ノ諸佛ノ證誠ニ、エカタキホトヲアラハセリ」文。

次に「具足煩惱」等の一行は、語は『禮讚』^五「自身是具足煩惱凡夫」の文に依る、第二句は、『散善義』^四「白道の合法の文に、初には清淨願往生心と云ひ、後には乘彼願力之道

と云ひて、行者の信心と如來選擇の願心と、一なることを顯はす文に依る、之を「信卷」別序に「獲得信樂發起自來選擇願心」と云へり。『散善義』^十に「一心正念直來我能護汝」文。『同』^四に「四十八願攝受衆生」文の文など引合すべし。

次に「此人即非凡」等の二行は、先づ非凡數攝の語、本は『序分義』^{五十一}の文なり。今、之を轉用して、現生正定聚の義に取りなせば、『玄義分』^四に「聖衆莊嚴即現在彼衆、及十方法界同生者是也」の文を當依れば、能く合する。「是人中」等の三句は、『散善義』^九に「五種の嘉譽を擧る文を見るべし」。

(義解) 此文の初に、難値難信を明すは、『大經』の流通分の「如來興世難値難見」の文と「若聞斯經信樂愛持難中之難無過此難」の意なり。

難値は法の希有奇特を顯はし、難信は其最尊超勝を表はす。我等、幸に奇特最勝の妙法に値ひ、但信稱名して大果を辨ず、豈、喜び且つ樂しからずや。海東講師、喟然として歎じて曰く、「方袍圓頂者多、起行修道輩無幾、禮佛聞法者常多、深信稱名之人或寡矣、多是信解分齊未得深信。故三業所修懶惰甚矣、而見稱名者貶爲自力、見恭敬者嫌

爲起行、此類不少。口廢口稱欲立信心、猶謂離光得珠。若無信心欲相續稱名猶爲捨華覓香。祖云久入願海深知佛恩、恒常稱念不可思議德海。諸子此慈訓に接して、如何なる感あるや。

眞宗叵遇は、『散善義』の終の語にして、「淨土之要難逢」に對す、要弘二門相對して、弘願眞宗の超勝を詮はず。

遇は『一多證文』に「遇ハマウアフトイフ、マウアフトイウハ本願力ヲ信スルナリ」文と釋して、遇とは信ずること、叵遇とは難信の義なり、(叵音波、普可切、不可也)、其難信の義を『大經』の語を借て、顯はしたるが「難中之難」等の十字なり。『和讃』に曰く、「一代諸教ノ信ヨリモ、弘願ノ信樂ナホカタシ、難中之難トトキタマヒ、無過之難トノヘタマフ」。諸教超過の法門は、容易に信じ難し。禪徒云く、眞宗の人、口を開けば他力を説く、男子生れて、佛門に入て大心を發す、艱難其れ何物ぞ、吾曹に在ては、自力を曲げて他力を頼む程苦しき事はなしと。現代には、此種の壯士諸方に満てり、宜しく盤根錯節に當りて、其利鈍を試むべきなり。奇特最勝の妙法は難信なり、難解なり、如何にして、

此關門を透過して、心光常護の安宅に入るべきか。

獲信の因縁に二あり、一には釋迦諸佛の善巧と、二には彌陀願力の引接となり、釋迦諸佛の善巧は縁なり、彌陀願力の引接は因なり。三佛の因縁具足するが故に、眞實信心を獲るなり。

如何なるを釋迦の善巧と云ふや、云く、釋迦如來は一切衆生の悲母として、娑婆往來八千度して、我等に本願一乘を信ぜしめんとて、種々に善巧方便して或は八相身を以て、或は隨類身を以て、一切經を説き給へり。凡そ八萬四千の法門は、皆これ淨土の方便の善なり、此方便假門より、諸の衆生を勸誘して、本願一乘に入れ給ふが釋迦の善巧なり。(『一多證文』「安心決定鈔」本_四を參照すべし)。

云何なるを諸佛の善巧と云ふや、云く、『小經』の説に依るに、十方の諸佛は、釋迦所説の一日七日の彌陀弘願の念佛の得益を、出舌證誠せり。加之、彌陀の功德を讚歎し、念佛行者を護念し給ふは、慈父に等しき蔭覆に非ずや。

如是く、釋迦諸佛が一心同聲に衆生に往生を勸むるは、我等の執るべき道は、金輪際、

弘願一乘を信ずるより外に、道なきを語るもの、而して、西方の彌陀は、我に歸せよと招喚し給ふ、行者能く心を鎮めて、己が能を思量せよ、茲に我等の進むべき道は開かれん、淨土があるとか、無いとか、諸佛がドーのコーのと、氣儘を居ふて居る間は、まだ自己の問題となつて居らぬ證據である。報命將に盡きんとし、大期當に來らんとする時、小言を云ふて居る隙ありや否や、せつばつまらねば眞の味は分らぬ、ドーこねて見ても、落付かぬので、匙を投げて、始めて不思議が分る、始からの他力では、味が無い、自力で如何にもがいても、埒あかんと甲を脱だ時に、始めて分る徒者の味、此に至るには、千辛萬苦の道中がある。蓋は四度皮を脱て藪となる、他力念佛の糸が出るのは、幾度も幾度も、贖物を放下した後の事である。實に難中之難である。難中之難の至寶を得る故に、慶喜の心も起れば、亦佛からも嘉譽さるゝのである。

文を解すに、慈悲の父母を釋迦彌陀二尊に配するは、『善導和讃』の「釋迦彌陀ハ慈悲ノ父母」、『末燈鈔』三唯信文意六亦然り。『般舟讚』は父母を釋迦に約し、『法事讚』上五には釋迦諸佛を擧げて、「佛是衆生大慈悲父」と云へり。今文、慈悲を釋迦諸佛に屬し、彌

陀の願力と相對するは、三佛三隨順の意にして、殊に極難信の法を信受するは、諸佛の證誠に由ることを顯はすの意あり、『末讚』に云く「眞實信心ウルコトハ、末法濁世ニマレナリト、恒沙ノ諸佛ノ證誠に、エカタキホトラアラハセリ」文。

次に「慈悲父母」の上に、「眞實」の二字を冠らしむるは、愛見の慈悲(凡夫の盲愛)を選ぶ爲なり。

無上眞實信とは、佛の無上の智慧を信ずる信心なる故に、無上と云ふ、他力廻向の故に、眞實信と云ふ。

「具足煩惱凡夫人」とは『禮讚』の機の深信の文の意、「佛願力攝取」とは、『散善義』の法の深信の文の意を、二河喻の白道に會合し、唯一の白道を、一處には行者の信心に喩へ、一所には如來の願力に比べて、「能生清淨願往生心」の信心は「乘彼願力之道」の表現なりと顯はす、「信卷」別序に「獲得信樂發起自如來選擇願心」文の意に同じ。

「非凡數攝」とは、『序分義』の上では、娑婆は苦の土である。苦のあるは當り前て、若し苦を受けぬ人が世の中に有りとせば、夫は凡人ではないとの意。今は轉用して、他力

の大信を得た人は、信の一念に六趣四生の因亡じ、果滅する故に、正定聚の位に入れば、もはや凡夫とは云はれぬとの意。

人中芬陀利華は、『觀經』の説にして、芬陀利華は白蓮華と翻ずる、此芬陀利華を開きて五に分けたが善導の五種の嘉譽なり。其中、今四種を擧げて、好人を略す、此は妙好人の中へ收めたるなり。

斯信とは語略なり、具に云へば「得斯信者」なり。

問云、『觀經』及び『疏』文では念佛者の嘉譽なり。今、吾祖信者の稱讚とし給ふは、如何なる由ぞや。

答云、經に「何況憶念」とあり、之を『疏』文に、「正念歸依」と釋せり。元來、此『觀經』流通の一段の文は、但聞名と如實の稱名とを相對する所で、「若善男女」とは念佛の機なり、「但聞佛名」等とは、但三身の名號を聞くすら無量劫の罪を除く、況や如實の稱名憶念をやと、比較顯勝する所なり、正念の語は、信と行とに通ずる（『末燈鈔』初）「正念トイフハ本弘誓願ノ信樂サタマルヲイフナリ」、『和讚』に「正念ヲウトハサタメタレ」の左訓に

「往生ノ信心アルヲ正念ヲウトハイフ」、『禮讚』五「得正念故」の正念は信心のことなり。また二河喩の一心正念を、『禿鈔』下に釋して、「第一希有行也」と云ふが如きは、念佛のことなり。歸依とは、『淨土論』の一心歸命なり、然らば經文の憶念とは正念歸依、即ち如實の稱念一心歸命なり。之を次の經文に受けて、「若念佛者當知此人」と云へば、憶念の安心より顯はるゝ念佛者にして、我祖は本に約して、信心の行者とし給ふなり。此若念佛者の文、一寸見れば、觀念の如く見ゆれども、下の「即是持無量壽佛名」より返見れば、稱名念佛となる、之が古今楷定の高判である。

四 眞 實 證

到_レ安樂土必自然_ニ 即證_チ法性之常樂_ヲ

入 出 二 門

建長八歲丙辰三月二十三日 書寫之

（本據）『玄義分』序題門終に「捨此穢身即證法性之常樂」文『法事讚』下「從佛逍遙歸自然自然即是彌陀國」文。

(義解) 安樂土とは、彌陀の眞報土の名なり、此偈の始終淨土を呼ぶに安樂と云ひ、蓮華藏界と云ひて、極樂の名稱を用ひざるは、三經の眞實を明す『論』『論註』を所依とするに依る。極樂の名は、『觀』『小』二經に出て、眞假に通ずる名なり、故に、『大經』に出る眞報土の別名たる、安樂の名を用ひ給ふなり。

自然に二義あり。

一に願力自然、是は『大經』に「自然之所牽」と云ふ、他力を顯はす語なり。『銘文』本六「眞實信ヲエタルヒトハ大願業力ノユヘニ自然ニ淨土ノ業因タカハスシテカノ業力ニヒカル、ユヘニユキヤスク無上大涅槃ニノホルニキハマリナシトノタマヘルナリ」文の意なり。

二に、無爲自然、此は『大經』に「無爲自然次於泥洹之道」と云ふ、此時の自然は、法性天然の理の生滅を超へ離れたるを云ふ、彌陀の淨土は、無爲自然の證りの國なる故に、自然の淨土と云ふ。

今文二義を含む、所謂、義兼兩向にして、上に向へば願力自然なり、煩惱具足の凡夫

が淨土に往生するは、全く本願他力の然らしむる所なるを顯はす。又下に向ては、此自然の語を直に受けて法性常樂と云へば、法性の作爲を離れたることを顯はす語となる。

法性とは、諸法の體性にて、眞如實相を指す、『唯信文意』天「カナラス大涅槃ニイタルヲ法性ノミヤコヘカヘルトマフスナリ、カ法性ノ常樂ヲ證ストモイフ、無上覺ニイタルトモマフスナリ」文。

法性之常樂とは、大涅槃の異名なり。涅槃の四徳の中、常樂の二を出して、我淨を略せり、無衰無變を常と云ふ、無苦無樂を樂と云ふ、大自在を得るを我と云ふ、三惑の染汚を離れたれば淨と云ふ。

即とは、同時即にして、往生即成佛を顯はす語なり。

上來、『二門偈』一部を通覽するに、其始、論主の一心より起りて、次に其一心を因として、結果する所生の妙土を明し。如是き一因一果は、全く如來の本願力成就の賜にして、迺の一字に由て獲得する速滿寶海の利益なりと定め。次に、如是き本願力は何に由て出來上りしかを尋ねて、法藏因位の修行に及び、菩薩永劫の勝行は、五念門の修行

にありと断定して、上求菩提の妙樂心と五念門の行と願行成就して、無上道を得給へり。此の如き法藏成佛の因果は、全く利物大悲の利他行爲なればとて、爲物身の本領を發揮して、論文では願生行者の勤むべき五念門、及び行者の登るべき速得菩提を、法藏菩薩の所修所得として明し給ふ。其意、願生行者の一心五念の心行は、全く法藏因位の願行の顯發にして、所得の佛果亦他力廻向なることを顯はすに在り。如是く解釋するは、全く玄簡大士の他利々他の深義釋の指南に據るものなりとて、行者の五念は願力成就のものなれば、五果亦他力廻向なるは理在絶言、之を行者に受得するは、名義相應の信の一念、此一念の信心を因として、證大涅槃の妙果を得る、茲に衆生往生の因果満足して、煩惱生死の泥中に廻入して、普賢利生の妙用を起す。如是き往還二種の利益は、全く如來の本誓妙力の然らしむるが致す所なれば、「入出二門名他力」なりと結論し給へるが、此書一部の主旨なりとす。他語以て之を言へば、他力廻向の教行信證を明すを、一篇の大主意とするなり。

之を相承する西河禪師は、聖道淨土の二教を判じて、淨土教を以て眞實教と定め、末法の衆生を救ふ行は、稱名の一行に在りとして眞實行と判じ、之を信ずる三信は、往生安樂國の正因と斷じて、眞實の信心による證果を生死即大涅槃と定められたり。されば、西河一代の化導は、易行他力の四法を流傳するの外なし。降て、光明に來れば、他力の念佛の一法を眞宗と判じ、之が能詮の教を圓頓教と論斷し、此法を信ずることは諸佛、別しては釋迦彌陀二尊の矜哀によることを述べて。我、今、二尊の善巧に由て、他力の信心を決定して最勝人の列に入り、安養の淨刹に入て法性の常樂を證すること、偏に願力自然の賜なりと、他力廻向の四法を慶讚し給ふ。

されば、『二門偈』一部、一論三師の釋を擧ぐると雖も、一言以て之を掩はゞ、他力廻向の教行信證を明すの外なし。噫慶哉！念佛の行者は、他力より賜はる信心なるが故に、自力の作爲を離れて、偏に他力の願船に托す。信後の行業、亦他力催促の太行なるが故に、行に行功を見ざれば、信じて信ぜず、作して作さず。之を他力の信行と云ふ。元祖常に言はく、義なきを義とすと。此一語實に妙味津々肺肝を衝くの感あり。大乘教の極意は圓頓一乘に在り。圓融圓滿頓極頓足、之を一乘圓教の至極とす。境圓なるが故

に智亦圓、智圓なるが故に行亦圓、境は性に於て、智行は修なり。全性起修の故に、智行も亦圓融して性に稱ふ、故に作して作さず、之を無作の妙行と云ふ。性を全ふするの智行は、性徳を徹照して、之を其儘行爲に現はす故に、無作の行と云ふ。無作の行、性徳のまま、が現はれたる智、即無縁の縁語は實に美なれども、之を實行に現はすこと甚難々々。心の儘に行ふて、規矩を逾へざる底の達士に非ざる限り、實行は絶望ならん。這般の消息は他力の大道に入りて始めて味ひ得る所なるを知る。全性起修とは、大行を全ふして起る淨信を云ふ、則利他深廣、信心是なり。之を行爲に現はす時は、眞實信心の流露たる必具の稱名是なり。全修在性とは、信樂の體は至徳の尊號なるを云ふ、信を得たる體は、即ち南無阿彌陀佛なりと心得れば、口も心も一なり、性にありても六字、修(機)に在りても六字、口に現はれても六字なれば、六字は生佛を一貫して機法は一を知り得べし。一乗家の學匠は法を動的に解して、法の動きて行者の上に全的に活動するを、圓頓行者の智解行爲と説き來り、無縁無作の妙智妙行と談ずる所なれども、眞に其妙所に悟入する人、幾人かある。難有哉、弘願他力の眞宗は、一文不通の身にして、名體不離の名號

を全領して、進止寤寐無倦常護の慈尊の下に起伏し、大乘佛教の最高峰たる無作の妙行の洪益に預ること、幾何の幸慶ぞや。當夏、辱なく尊命を蒙り、此書を講讀し、本日滿了に及ぶこと、偏に佛祖の冥佑の致す所と感佩し奉る次第で御座ります。

五月十五日葵祭の日擲筆

入出二門偈略述 終

302
123

昭和十年六月三十日 印刷
昭和十年七月十日 發行

非賣品

著者 本多主馬

發行者 京都市上京區小山上總町大谷大學安居事務所內

朝倉慶友

京都市上京區小山上總町大谷大學內

發行所 安居事務所

京都市下京區正面通烏丸東入
廿人講町二十番地

印刷者 西村七兵衛
印刷所 法藏館印刷部

終